

同志社大学通信

ONE PURPOSE

FOR BETTER COMMUNICATION

特集／大学生活を検証する
同志社人訪問／田口 賢司さん
J-Sky sports (スカイパーフェクTV)
総合プロデューサーに聞く

No.122

2000 APRIL

DOSHISHA UNIVERSITY



2000
▲
NO.
122
▼
APRIL

COVER STORY

【表紙の情景】



今出川キャンパスとひとつ通りを隔てた東側に建つ「アーモスト館」。この洋館は1932年にアーモスト・同志社プログラムの第1回学生代表であったニコルズの母親やアーモスト大学の卒業生たちからの寄付によって建てられた。アーモスト寮は学生自治のもと、自主的に管理・運営され、現在11人の学生が暮らしている。部屋を紹介してくれた平田真衣子さん(文学部文化学科4年次生)の、「キャンパスのすぐそばで、恵まれた教育環境」という言葉通り、窓の外にはクラーク記念館が間近に尖塔を覗かせている。歴史漂う建物の造りや雰囲気抱かれての暮らしの中で、つねにその重みを感じる一方、あらためて同大生としての誇りを持つことができたという。毎年3月と11月に入寮選考会が行われている。

●アーモスト寮ホームページ

<http://www6.org1.com/amherst/>

今回から、同志社大学のさまざまな「人」や「場所」に目を向け、そこで学び、暮らし、活動する同大生の自然な姿を追っていきます。

C O N T E N T S

特集

同大生の生活に見る大学で学ぶ意義

大学生生活を 検証する

2



同志社人訪問●田口 賢司さん

J-Sky sports (スカイパーフェクTV)

総合プロデューサーに聞く

7

若者と「癒し」

10

What's on Thursdays! = WOT (ワット!)

木曜日には何かある！

11

ゼミ・ゼミ おじゃまします●法学部法律学科：田井 義信ゼミ

ゼミのために一週間はあある(?)

～ディベートに耐え、法的思考力を養成する～

13

留学生の眼●山本 和男さん・森川 将名さん

悲喜こもごもの留学体験でつかんだものは？

15

キャンパスニュース&アナウンスメント

16

ONE PURPOSE コメンタリー

21

本学教員の推薦する VIDEO&BOOK

23

私と「仕事」

25

■ 特集 ■ 同大生の生活に見る大学で学ぶ意義

大学生活を検証する

大学で学ぶ意義は、過去十二年間に学んできたことの集大成として、自らの意志に基づいて、学びたいことを学び、生きたい時間を自由に生きることにある。しかし、自由であるがゆえに放縦に流れたり、自らを見失うことになつては、無為に四年間が過ぎ去っていく。今回の特集は、新年度を、そして新入学生を迎えるにあたり、四人の同大生の大学生活を通して、大学で学び暮らすことの意義を考えるきっかけとしたい。

※ 記載されている学生は収録時のものです

「自主自立」をモットーに過ごす
私の大学生活は盛りだくさんな
ミックスサラダのよう。

「四時になら

松尾 美穂さん

【商学部商学科】3年次生

たら起こして

ね」と、パワーポ

イントの画面作

成を級友たちに

託し、仮眠に入

ったのは昨夜の

三時頃。目を覚ますと、すでに陽は高く昇つ

ていた。「ごめんなさい、後は私が」と、朝食

の準備をすませ、再びパワーポイントに取り組

む。十五時間以上かけた資料づくりもようやく

完成した。けれど、ここに来て問題が発覚

もうひとつ、明日提出の課題が終わってなか

たのだ。あわてて課題を仕上げるためにパソコ

ンに向かう。

いよいよゼミの発表の朝がきた。今日は、一

講時から授業があるが、二週間もかけて準備

したゼミ発表が三講時にあるので、客観した



だぐことにする。レジメの準備、パワーポイン

トの調整、リハーサルなど、発表の直前までや

らないといけないことがたくさんある。生協で

購入したサンドイッチと野菜ジュースを食へな

が最後のリハーサル。自分の調べたことをみ

んなの前で発表するのは、何度やっても緊張す

る。今回の私たちの発表テーマは、「企業と顧客

そして顧客間のインタラクティブコミュニケーション」。

昨年、学生スタッフとして参加した「A.L

エゴロジ」キャンプで子供たちを無人島へ引率

した経験が、格好の参考事例になった。つくづ

く何事も経験だと思ふ。なんとか、発表も終

わり、後片づけ。徹夜した甲斐もあって、すば

らしい発表だったと先生からおほめの言葉を

いただき、徹夜はしんどい反面、またそれも楽

しい。でもしばらくはいいかな。

翌日からは、通常の生活にもどる。商学部

の勉強はかなり幅広くて、経済、流通、観光、

貿易、管理、会計などの中から、自分のやりた

い勉強をピックアップすることができ、ワーク

シヨプという大学院との合同授業があつて、ベ

ンチャー企業の社長や起業家の講演を聴くこ

ともできる。実際にフィールドで働く学外者の

話を聴けるのはすごく魅力的。お昼は、交換

留学生として同志社に来ているイギリス人の

友人と食事をいっしょにとる。彼女とは大学の

国際課のプログラムで仲良しになった。二カ月

前に彼女が日

本に来た際、

区役所の手続

きなどに付き

添ったのがき

つかけ。三講

時は「日本経

済



「入門」という留学生向けの授業だ。授業はすべて英語で行われる。聞きとるだけで精一杯。留学生の友人たちが「ノートを貸してあげる」と応援してくれるので心強い。

授業が終わると、アルバイト先の塾へ塾として生徒のことを一番に考えないといけないし、すごく責任の重い仕事。でも「わがた」と生徒がうれしそうに答えてくれるのが何よりもうれしくて、今年で三年目を迎える。塾の講師として目には見えない仕事がたくさんあつて、あらかじめ授業の前にプリントをコピーしたり、テストの採点をしたり。大変な部分もあるけど、大好きな生徒たちのことを考えると頑張らなくちゃと思う。「人に何かを頼まれたら、九八%でお茶をにこしてはいけない。残りの二%は、君たちにとつてたまたまの二%でも、相手にとっては、その何十倍ものマイナスになる。これはゼミの亀田先生の言葉。どんな時でもこの言葉をちとに頑張る。本当に不思議なもので、今は塾長が信頼を置いてくれるだけでなく、生徒との距離もうんと近くなった気がする。

大学生生活の自己採点

以前は、とても内気だったのに、今はいろいろな授業や課外活動に参加しています。函館キャンパスにも参加しましたが、当時の仲間とは今もとってもいい仲。アルバイトは、塾の講師のほかにも、今出川キャンパス・ツアーのガイドをしています。京都の街を散策中に見つけた小さな雑貨屋さんに、手作りのピアスやポストカードを卸す「作家活動」をしたり、日曜日には子供たちに野外生活を指導するボランティアもしています。大学生活は残りあと1年ですが、悔いのない学生生活を送っていると自信を持っていえそうです。

好きなことを精一杯やる。
それが将来への
布石になっている。

グラフィック 奥村 和馬さん

デザイナー志望と聞くと、どうもみんな奇妙な印象を受けるようです。



【文学部社会科学部関係学部専攻】3年次生

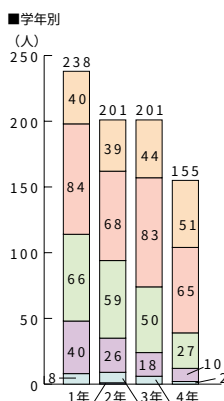
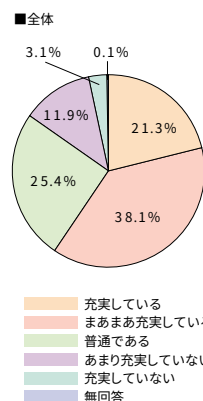
ライタイだろとか、それなら芸大に進むべきだという反応が返ってきます。しかし、考えてみると大学は将来の職業のための専門知識を磨くところではありません。幅広い知識とそれに裏付けられた自分なりの考え方を身につけるところです。したがって僕のようなデザイナーを目指す学生が、産業関係学を専攻し、企業や社会、メディアやマーケティングなどについて学ぶのは実に自然なことだと思うのです。授業は、発表や討論、企画立案など将来きつと役に立つであろう実践的なものが多く、企業や社会の第一線で活躍中の方の話を聞くチャンスもあるので、休まず出席するようにしています。



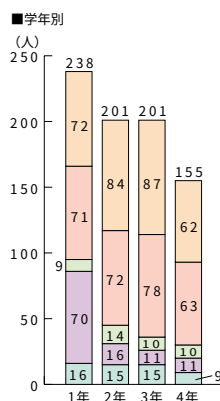
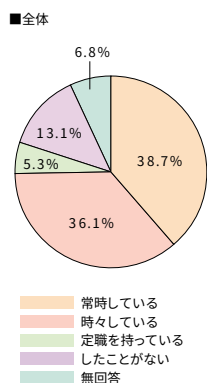
学生アンケート

以下のデータは、一九九八年十月に日本私立大学連盟が実施した「第十回学生生活実態調査」に、本学学生部が協力して行ったアンケート結果のうち、本学学生のみの集計をしたものです。

●「あなたの学生生活は充実していますか？」



●「あなたはアルバイトをしていますか？」



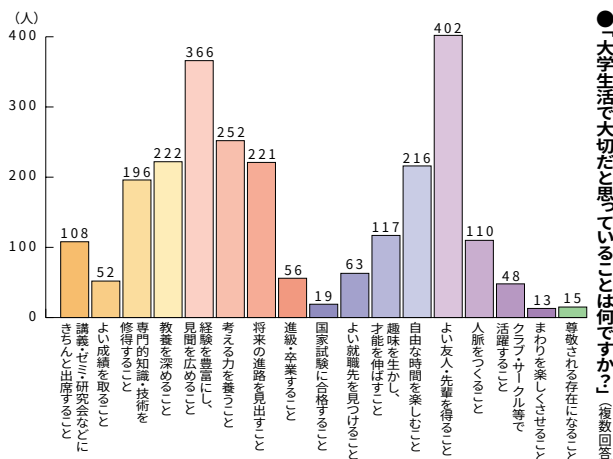
課外活動としては、友人たちとサークル「Cafe」をつくり、主にクラブイベントを主催。僕自身もDJとして出演しています。きっかけは、知人に紹介されたシフトバー。アルバイトとして働きはじめてその店は、六〇から七〇年代のワグ、八〇年代のニューウェーブそして九〇年代のオルタナワグ、ミクスチャー、テクノ……幅広いジャンルの曲をその時々で雰囲気に応じて選曲していました。僕にとってはそれが新鮮な驚きだったのです。生来、音楽は大好きですが、音楽によって人の気持ちやその場の雰囲気や自在に操作することの快感や楽しさをその店で知ってからは、本格的にDJ活動をしようにという気になりました。現在、京都のクラブで「Medit」というDJイベントを主催しています。企画から準備の打ち合わせ、スケジュール調整、スワフとの折衝などの運営作業と並行し、ライブでの選曲やパソコンへの打ち込み作業も行わなければならない。本番までは超過密なスケジュールになります。午前中に授業がある日は「もう気力で頑張るしかない」といった感じですが、でもこの苦勞も好きだからできること。イベントの前の緊張感や成功した時の達成感、日常生活では味わうことのできない感覚だし、目指しているクリエイティブな世界にも共通するものだと思います。たとえ連日徹夜になろうと、適当に済ます気にはとてもなれません。

クリエイター志望として、現在マガジンの関係西支社で編集アシスタントのアルバイトをしています。ただか週一回ですが、デザイナーやエディターといったクリエイターたちの仕事の現場を覗くことができ、普段何気なく読んでいた雑誌が、いかに企画され、どのようなブ

大学生生活の自己採点

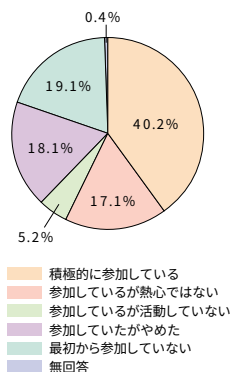
僕には、大手広告代理店のCR局でクリエイターとして働くという夢があります。選んだ学部も、サークル活動も、アルバイトも、僕にとってはその布石になると思ったものばかりです。より高次のクリエイティビティーを求めるためには、産業構造への理解が必要だし、広告・マスコミ業界の知識、さらには音楽ムーブメントへの造詣が不可欠だと思うのです。デザインの方は、まだ自主イベントのフライヤー程度ですが、確実に夢に近づいているという実感を持っています。

ロゼで作られるのがよく分かって、将来に備えた勉強にあてています。大学で学んでいると、社会の真相の間には一見ギャップがあるようですが、僕にとっては共に興味深い対象なのです。

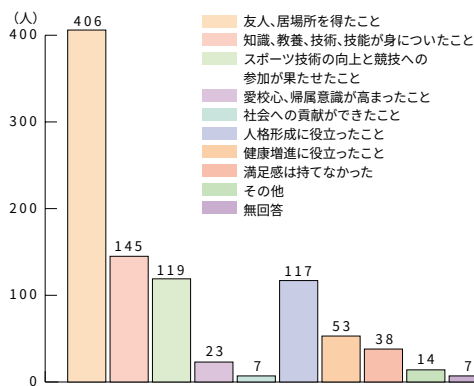


●「大学生活で大切なこと」は何ですか? (複数回答)

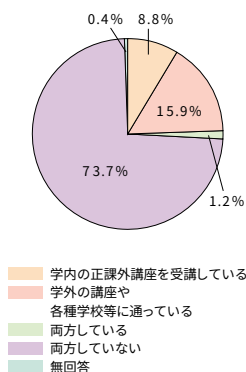
●「課外活動に参加していますか?」



●「課外活動に参加して、満足度の高いものはありますか?」 (複数回答)



●「学内の正課外授業を受講したり、学外の各種学校等に通っていますか?」



※「一九九八年度学生部年報」から抜粋

特許もボーダーレスの時代。
だから、弁理士を目指すにも
英語力が不可欠なのです。

私は、昨夏か 宮原 章子さん

ら弁理士資格

【法学部法律学科 三年次生

を目指して猛
勉強を始めま
した。現在大学
のカリキュラム
でも履修し、学



んでいるのですが、問題がひとつあります。それは、近年特許も国際化の傾向が強まり、弁理士にも日常会話以上の高度な語学力が必要とされはじめているということです。自分の語学力を知るうえで有意義なので、以前からTOEICのテストは受けてきましたが、国際派の弁理士を目指すとなると、もっと上を目指さなければ、と自分に言い聞かせて、勉強に励んでいます。とくにテストを間近に控えたこの頃は、学校でも、家でも日々猛勉強。もちろん、語学力だけでなく、国際法関連の勉強も不可欠ですから、大学院の授業に出席しています。ところが、これがかなりハイレベル。少しでもぼつとするとついていけないので、授業中はいつも真剣勝負です。

なぜ弁理士を目指す心境になったのかというと、一年次の秋に大病を患ってからです。入院生活の中で考えたのは、大切な人生のだから悔いを残してはいけないということでした。現在、週末だけ資格取得の学校TACで受付のアルバイトをしています。が、受講生には



同大生も多く、みんな仲間のようない関係です。とはいえず、存知の通り公認会計士はかなりハードで難関ですから、みんな必死で勉強しています。その姿

を見てみると、私も負けていけないという思いが湧いてきます。つどで横になったまま、大学へも通えなかった日々。私は、自分の道をしっかりと踏み締めて歩いて行こうと決意しました。このように書く、資格取得対策で明け暮れているように感じるかもしれませんが、TOEICのテストが終わればマイペース父のアドバイスで買ったiMacでメール交換したり、カフェやレストランで気の合う友達とおしゃべりしたり、と楽しむことも忘れていません。これからも自分が目指す目標に向かって、勉強する時はする、遊ぶ時は遊ぶとメリハリをつけて努力していこうと思っています。

大学生活の自己採点

病が癒えたあと、語学研修のためにアメリカで約一カ月過ごしました。その時の開放感が今も忘れられません。病院の暮らしが続いたからだけではありません。自分の好きな道をひたむきに歩んでいけそうな、そんな環境を感じたからです。だから私は弁理士の国家試験の合格通知を手にしたら、それを持ってアメリカに渡ろうと思います。資格は私にとってゴールではなく、次のステップに進むパスポートなのです。



週四日は同大生。
あとの三日は、主婦として
充実の日々を暮らす。

同志社の神 木村 豊子さん

学部に入學し

【神学部神学科】一年次生

で、早いもので
一年がたとうと
しています。当
初は、ふた回り
以上も年齢差



のある学生たちと机を並べて学ぶのに戸惑いを感じましたが、最近では逆に、若い人たちの考え方や価値観に触れることで、気づかされるのがたくさんあって、新鮮な毎日を送っています。

月曜日から木曜日までが、私が大学生になる日です。聖書学、メディア史、倫理学、政治学などの理論学習から神学英語、ドイツ語などの語学演習まで、カリキュラムは盛りだくさん。二十年近くも勉強から遠ざかっていた

大学生活の自己採点

私が同志社大学への入学を決意したのはキリスト教神学を体系的に学んでみたいと思ったからです。家族の負担を考えると、決意にもぶりましたが、学ぶにはタイミングがあり、私にとって今がその時だと考えました。もちろん向学心の旺盛な修学年齢で学ぶにこしたことはありませんが、学びたいテーマは人生の中で変わることもあります。衰えた記憶力で鞭打ちながら頑張っていると、学ぶことの楽しさがこみ上げてくるように感じます。

私にとっては、九十分間という授業時間が耐えられない長さに感じられ、緊張を持続するのに最初は苦労しました。さらに、学ぶことに年齢は関係ないとはいえず、記憶力の低下を痛感せざるをえませんでした。現在も神学英語の授業で毎週単語のテストがあり、十の単語を覚えるだけでも四苦八苦しています。

一方、以前から興味はあったものの、躊躇していたコンピュータが曲がりなりにもマスターできたのは、大きな収穫。先生が分かりやすく、しかも丁寧に教えてくださり、今ではインターネット検索はもちろん、ホームページ開設の基本的な手法もマスターするまでに達し、家族にも自慢しているほどです。

自宅は名古屋なので、月曜日に京都に入り金曜日に名古屋に帰る単身赴任のような生活です。京都出身なので、月曜日から木曜日までは美家で寝泊まりし、まるで娘に返った気分で大学生活を送っています。もちろん、こんな楽しく充実した日々が過ぎるのも家族の理解があつてこそ。ですから週末は、家庭サービスの日として主婦業に専心。これからも両立していきたいものです。

大学生活と時間

大学生活というのは、年齢に関係なくあらゆる人にとっての青春であり、自分の可能性を追究するとても大切な時間である。偏差値をあてにして受験をくぐりぬけてきた学生たちは、受験が自分たちの可能性を決めるのだとの思い違いをしていることが多いが、本当の意味でのチャレンジは、大学へ入学してからの生活にかかっている。将来、自分の本当にやりたいことを、自分の一生を懸ける値打ちがあると思えることを、大学で探し求めて欲しい。四年間という大学生活の時間は長いように見えてとても短い。にもかかわらず、自由という言葉に甘えて、何となく日々を過ごしたり、まわりに流されるように暮らしてしまふ学生も多いように思う。目的を持たず、ふわふわと漂うがごとく過ごす学生生活は、夢のように楽しく気楽であっても、覚めてみればそこに何も残っていない。いつか何かが見つかるだろうと、待つばかりの生活では、何も見つからないし、何も手に入れることはできない。資格試験であれ、留学であれ、何かを目指すなら、その目標に向かって、自分のすべてを懸けるべきだし、「できたらいいなとか」受かればいいなといった淡い夢を抱いているだけなら、その夢がかなう見込みはほとんどありえないであろう。社会に出る際に、「大

学時代、どのようなことをしてきましたか」と聞かれても答えられず、「どのようなことができますか」と聞かれて、これと胸をはって言えるものがないことほど、恥ずかしいことはない。

大学生という身分に与えられた短い時間を一瞬たりとも無駄にせず、青春のエネルギーのすべてを傾けて生きるべきである。勉強を通して自分の関心のある専門を見極め、クラブやサークルを通じてリーダシップや集団生活における人間関係を学び、更にバイトやインターンシップによって社会にふれることは何にも代え難い貴重な経験である。これらすべてのことを、自分の中でうまくリンクさせながら、与えられた時間を最大限に使いこなすことがとても大切である。充実した大学生活を送る中で、青春真っ只中にいる自分を見つめ、「現在」という時間の大切さを噛みしめて欲しいと思う。やがて大学生活が終わった時に、四年間を振り返ってみて、そこに確かな手応えと誇りを持てるように、現在を生きて欲しい。夢を抱くことが青春の特権であるが、ただ夢見てばかりいるのではなく、夢を実現するために、自分に与えられたすべての時間を注ぐことこそ、青春のあるべき姿である。



【文学部助教授】
勝山 貴之



田口 賢司さん

（一九八五年文学部文化学科哲学及倫理学専攻卒業）

一九六〇年、岐阜県に生まれる。同志社大学在学中は、自治会書記長をつとめる。就職活動もここに、東京に出てクラブで弓の演奏活動をした。放送番組の大手制作会社「レマン・ニオン」に入社。深夜枠向けの番組制作を主に手掛ける。九五年から渡米し、九七年夏に帰国。スカイパーフェクTVを主宰するスカイエンターテインメント株式会社に入社し、スポーツ専門の「J-Sky Sports」の番組制作を総合的にプロデュースする。著書には小説「ラプリー」(新潮社)ほか二冊がある。

J-Sky Sports (スカイパーフェクTV) 総合プロデューサーに聞く



兼安 ● 世界中を飛び回っている田口さんが、ちょうど大阪に滞在中と聞き、お話を伺いに駆けつけました。

田口 ● ラグビーのTV中継で花園ラグビー場に来ており、しばらくは、こちらに滞在する予定になっています。

兼安 ● J-Sky Sportsの編成企画局スポーツ部プロデューサーということで、主にラグビーを担当されているとお聞きしています。

田口 ● ラグビーとサッカーを担当しています。国内の主要ゲームはもちろん、ラグビーだったらワールドカップ、サッカーならイタリアのセリエA、英国のプレミアリーグなどを生中継でお届けしています。ヨーロッパでの試合だと日本での放映時間が深夜になる。早朝の四時キックオフというのもざらですから、生活は極めて不規則です。昨年のラグビーワールドカップでは全試合を完全中継するために、ずっと英国に滞在していました。

兼安 ● 放送業界に飛び込んだきっかけは、

田口 ● 私は、大学生活の最後の一年はほとんど東京で過ごしていました。何をしていたかというところ、クラブでバンド活動をやっていたわけで、そろそろ就職を考えないといけない時期を迎え

て、自然にそちらの方向で職を探すことになった。生活のリズムも夜型になっていましたから、時間に縛られず働ける環境がいいし、表現者としての自分もどこかで残しておきたかったという点で見つけてきたのが、テレビ番組の制作会社でした。したがって、担当した番組も深夜枠のものが多く、ブルースの源流をたどる旅や伝説のギタリストを巡るシリーズなど、音楽に係わるドキュメンタリー番組が中心になりました。

兼安 ● 番組制作の生活が、何年くらい続いたのですか。

田口 ● 十年くらい続いたでしょうか。その後、少しお金が貯まったので、休職してニューヨークに渡りました。映画の勉強というか言語トレーニングですね。英語でもフランス語でもいいんですが、字幕無しに映画を見ることに専念していました。その間にも、NASAに出かけて火星探査機を取材するドキュメンタリー番組の仕事が舞い込んだりしていました。あくまでアルバイト程度で、ほとんどは断っていました。充電期間として、拘束されない自由な時間を過ごしていましたね。そんなときスカイパーフェクTVがラグビー協会と放映権の契約を結ぶと



いう情報が、耳に飛び込んできました。私は熱烈なラグビーファンを自認していましたが、TV番組の送り手になろうとは思えもしなかった。一方、ラグビーのファンとしては、貧弱な日本のスポーツ番組の放映体制には満足できないものを感じていましたから、この話は棄ててみる価値があると直感しました。さっそく関係者コンタクトをとり、まる二年に及ぶニューヨーク滞在を切り上げて帰国、スカイパーフェクTVVの開局から係わることになりました。

兼安 ● 熱烈なファンだとおっしゃる、ラグビーとの関係についてお聞かせください。

田口 ● ラグビーは以前から好きだったのですが、大学ラグビーにふれてからはラグビーに嵌まってしまうという表現がぴったりかもしれませんね。私は七九年度生ですから、一年先輩に林敏之さん、一年後輩に大八木淳史さん、二年後輩には現在日本代表の監督である平尾誠二さんがいた。同志社ラグビーの黄金期だったわけですね。だから国立競技場には必ず行て大願していましたね。

兼安 ● ラグビーのどこにそんなに惹かれたのでしょうか。

田口 ● スポーツは筋書きのないドラマだといえますね。私は筋書きがあるものは好きになれない。ドラマにしても物語にしても、始まりがあり、必ず終わりが来る。その間にもっともらし

いストーリーというものが準備されているわけですよ。一方スポーツはラグビーやサッカーには作られた筋書きがない。じっと見ている、いつ何が起こるか分からない。カウンスイフタダクというのがありますが、ONもOFFもなく、突然攻守とろろを変えるその瞬間の面白さですね。ラグビー中継の仕事を通して、同志社大学ラグビー部元部長の岡仁詩さんのお話を伺う機会がよくあるんですが、岡さんも同じ様に感じていられると思うんですね。というか、考え方がとてもフットボール的な方で、A地点からB地点を目指すとする。でもB地点に着いて良しとするんや面白くない。ならばその勢いでC地点まで行ってしまうという考え方をされます。最初の目標がいつの間にかすり替わっていても平気、したがって、問題はいつまでも帰結することなく、螺旋状にどんどん広がっていくわけで、そこがまた面白いんですよ。

兼安 ● プロデューサーという立場になて、ラグビーの持つそうした面白さをどのように伝えようとされていますか。

田口 ● プロデューサーとして私がやっていることは、ラグビー協会の方との打ち合わせやその他の諸々の交渉事、それに映像の見せ方を考え、クルと綿密にマーケティングを重ねます。地上波と違って衛星放送のCMで寸断されることもないし、スポンサーの意向を気にする必要もない。決められた予算内で、比較的自由な映像づくりができる。そういう点で衛星放送というのはフットボールの魅力を伝えやすいメディアです。球技場のスタンドで観戦しているような淡々とした、しかし抑揚のある時間の中でゲームを楽しむことができます。副音声で視聴すれば、実況も解説もないサウンドの生の音

だけ、球技場の臨場感を楽しむこともできます。

兼安 ● ラグビー実況に解説は不要だと田口 ● 客観的で適切なコメントは聞きたいと思えますよ。でも、スポーツは見たものがすべてだと考える人もいます。私もその一人ですが、語られたものは所詮後で頭で考えたものなので、私はスポーツとともに音楽が好きなんです。アメリカの六〇年代、七〇年代の音楽がね。なぜ好きかというと、ブルースなんか典型的だと思うのですが、三つのコードだけで音が流れていく。あたり前の歌詞があたり前に歌われ、音も変にこねくり回さない。私にとって歌詞はどうでもいいんです。どうせ愛だの恋だのが語られているのだから。音楽で教えられたくないし、説教じみたものを聞くくらいなら本を読んでいる方がましだ(笑)。言葉とは、私の中ではそのくらい意味が持たない。あるいはそのくらい大切にしたいものなんです。

兼安 ● 田口さんは、どのような学生だったのでしょうか。

田口 ● ひと言で言えば、変な学生でした。同志社と慶應義塾から合格通知をもらった。どちらに進もうか両親とも相談しましたが、京都で勉強するのがいいのではという結論になった。その実、私はずっと学生運動というものに憧れていて、すこし格好いいと思っていた。その尺度でいくと、学生運動がすでに沈静化している慶應は



魅力がなく、まだ元気に学生運動をやっている同志社には魅力があった結局私は同志社を選び、自決会に入ってヘルストをかなりしました(笑)。兼安●彼らは、なぞヘルストをかなりしたのでしよう。田口●あれは、医者が白衣を着るようなものですね。顔を隠して匿名性を大事にするというより、ユラオームですね。私は書記長をしていましたが、実はあまりまじめな運動家ではなかった。パンクロックのバンドもしていましたから、金色に染めた長髪をヘルストで包んで、格好のいい場面だけ登場する。その頃は岡さんが学生部長をやっていたので団交の場でよく衝突しました。ヘルストをかなり、顔を隠しているはずなのに、突然名前前で呼ばれたりしてね(笑)。

兼安●講義にもあまり出席しなかった。田口●文学部で、しかも哲学及倫理学専攻でしたから、何を勉強するかが難しい。授業に出席すると、イコール学点にはならないと考えていたし、今さら一般教養はという思いも強かった。一方、アーモスト寮の寮生でしたから、あそこに住んでいると時計がなくてもさわめきだけで時間が分かるほど、キャンパスの生活にどっぷり浸かっている。水曜日などはチャペルアワーの鐘で目を覚ましていた。あるときベランダで洗濯物を干していると、先生から電話が入り「田口、洗濯をしている場合か、ゼミはもう始まっているぞ」なんてこともありました(笑)。

兼安●番組プロデューサーとしてのお仕事のほか、すでに三冊本を出されていますが、今後の活躍の方向は？

田口●小さな野望はいっぱいあるんですが、さしあたっての目標は、ラグビーの試合中継を増

やして、視聴率をもっと高めることですね。将来的には、快い音楽が流れている風通しのいい部屋で、自分のペースで物を書き、休日になると、ラグビーの中継を見る、そんな生活を送りたい。その頃には、また京都にもなっているかもしれないね。

兼安●最後に、後輩の私たちに何卒アドバイスを。田口●突然、創立者の話を持ち出して恐縮ですが、正門を入ったところに良心の碑がありますね。そこには「良心之全身充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事」という言葉が刻まれている。しかし、良心が全身に充ちている人間を想像してみてください。考えただけでもアブナイと感じるでしょう。現実社会とのバランスを考えると、良心は半分くらいがちょうどいいんです。一方、この現実の社会というのは実は曲者でして、みんな通念というか、時代の言葉を何となく信じ、受け入れて暮らしている。洗脳されているといつもいいかもしれません。私は、あたりまえの日常を大切にしたいと考えていますが、ものを書くときは、つねに言葉は問題だ、と心して書くようにしています。つまり、知らず知らずのうちに受け入れている通念から、少し距離を置くように心掛けている。現実を、あるいは時代の言葉を批判するのも、結局はやっぱり言葉をもつてするわけですが、この距離を置くことを考えるのが大切だと思います。就職活動や何かで、厳しい現実にあふかったときには、みなさんも一度現実との関係を、あた切つて考えてみると、自分の生きるべき本来の道が見えてくるかもしれないよ。

兼安●どうも、ありがとうございました。

INTERVIEWER

兼安 久美子さん

【経済学部経済学科】 3年次生

「同志社スポーツアトム」編集局で主務をつとめる。2年次では高校時代に少ししかじったソフトテニスを、3年次からはラグビーを担当。「あまり話しながら選手からコメントを引き出すのに苦労することもあります。取材は楽しく、将来はスポーツのTV番組づくりに携わりたい」という。



(学年は収録時)

なぜラグビーなのか。なぜ衛星放送なのか。明確に語れる田口さんの生き方がうらやましい。

ラグビーに対する情熱は、田口さんの人生観、あるいは美意識に共通するものを感じました。ラグビーのファンだった田口さんが、観る側から観せる立場に代わり、J-Sky sportsの総合プロデューサーの重責を担えるのも、ラグビーあるいはスポーツの魅力を人間の営みと感動について高い見地から論じることができ、なお観戦者の心理の深奥をよく知っているからだと納得させられました。番組制作スタッフを目指す私も、スポーツの素晴らしさを忘れず、しかも主観に流されない、そんな報道や番組づくりに参画できれば楽しいだろうな、と夢を膨らませています。

若者と「癒し」

学校と家庭のはざ間からの叫びに応える

幼児虐待、学級崩壊など、子どもや若者を被害者、あるいは加害者とする事件が、連日マスコミを賑わしている。子どもや若者にいつか何が起こっているのか。この難題に挑むシンポジウムが、今出川キャンパス神学館礼拝堂で開催された。森孝一神学部長が司会をつとめ、芹沢俊介氏（評論家）、上田紀行氏（東京工業大学大学院助教授、小原克博氏（神学部助教授の三人のパネリストによる講演と、それに対する質疑応答が行われた。



どもから大人への儀式（イニシエーション）という終わりがあったが、今やそれもなく、単調な一本の道を走り抜けていく。セクスやドラッグ、自己改造セミナーに頼る、むなししい自己確認の作業だけが残されている単調な道を……。こうして考えてみると子どもたちは確かに病んでおり、傷ついている。しかし、何によって傷つき、その傷を「癒す」場所はどこにあるのか。さらに、個としての存在感やかけがえのなさを回復するために、家庭や学校は何ができるのだろうか。小原氏はテーマを整理し、いくつかの問題を提起して講演を終えた。

これを受けた上田氏は、「癒し」には二つのタイプがあるとする。一つは、群衆の中で孤独を癒す「人型」、もう一つは、周囲からしがらみを断つことで癒される「断ち切り型」。ところが若者たちは、自分を主張することによって人間関係が壊れるのを怖れて、自己を脱色化しようとする傾向が強くなり、自分を消し去るサバイバルゲームを行っているように見えるという。こうした若者の個を回復させるために、上田氏はわがままの復権を提唱。意図的に自分に色を付けてみることを勧める。

最後にマイクを握った芹沢氏は、茶髪、ガンダムのヤマンバ娘が驚くべき博識だった体験を例に出し、若者の生き方を肯定。彼ら

は新しい規範を生き始めているのだとする。たとえば化粧は、かつて身だしなみであったり、異性の気をひくためだったものが、自分に向かて化粧する彼女たちにとっては、自己発見のための手段となっている。新しい規範を生きようとするこうした若者たちは、今や「教育家族」の規範さえ乗り越えようとしているとして講演を結んだ。

上田氏が講演中に疑問を呈したように、本来元気なはずの若者がなぜ「癒し」の対象とならなければならないのか。それは、右肩上がりの経済を背景に築かれてきた社会規範が崩れ、新しい規範が示されないまま現在を生きざるを得ない世代として、彼らが苦悩を背負っているからだ。芹沢氏が語るように、若者たちに新しい規範を生きようとする兆候が見られるのだとすれば、幸いなのだが。



（本稿は、昨年十二月十一日、神学部主催のシンポジウムを開催し、まとめたものです。こうしたシンポジウムや講演会は、年間を通じて京田辺キャンパス、今出川キャンパスで行われています。本誌特設ページAnnouncementも、参照ください。）

小原氏は「教育家族」というキーワードから子どもの置かれた環境の変質を解き明かす。すなわち六〇年代末から七〇年代にかけて日本の家族は「教育家族」化する。それは子ども教育の最終責任が学校から家族に移ったことを意味し、学校は社会秩序の維持装置にしか過ぎなくなってしまう。そこで起った家庭の変質とは何か。親が子の予言者と化し、「勉強しないと、いい学校に入らないとお父さんのようになるよ」と託宣をくだし、子どもたちを将来に亘って支配しようとする。子どもたちもまた、教育を媒介した親との共犯関係の中で、個を失い、均質化した社会にひそむ「透明な存在」になっていく。かつては子

木曜日には何かある!

「木曜日には何かある」を合言葉に、学生課主催のWOTが好調だ。昨年度の参加者は映画・コンサートあわせて八千五百人を超えた。マスコミ各紙も「好評 軟らかな企画」(朝日新聞)「秋の夜長は日本映画で」(京都新聞)など、おおむね好意的である。では、なぜ映画なのか、WOTの本当の狙いとは何なのか。今年度のラインナップとともに紹介していきたい。



アッセンブリーとの合同企画「シベリア〜知られざるアジア」1999/12/16

教育という枠組で考える限りややハイブローな線を狙わざるをえない。WOTがサークル系学生に衝撃を与えたのは、そうした枠組みから一歩踏み込み、映画そのものをテーマにした企画を大学側が提示したことにある。では、なぜ映画だったのか? 特に必然があったわけではない。ただ、映画は視覚、聴覚を通して直接に感性を刺激する総合芸術であり、近年学生課がアッセンブリーアワーで力を注いだできた感性の領域にうまく合致した。そして、最近では学生ですらその存在を知らなくなってしまうた大学会館の新たな役割を考える上で、世代を超えた共通言語である映画が、コミュニケーションのなかでどのような役割を果たすことができるか可能性を探りたいというところもあった。

企画にあたっては、ラインナップにメッセーJ性をもたせることを基本とした。春は「九〇年代・日本映画を観る」秋は「これだけは観ておきたいー世界に誇る九人の巨匠達」とした。また「外国映画祭」との差別化をはかるため邦画のみとした。連続上映を行う場合のセオリーであるとはいえず、結果的にはこのラインナップのテーマ設定および作品選択には高い評価を得ることができた。

現役としてはおそらく京都でも最古とな

った35ミリ映写機の機嫌をとりながら、おそろのおそろWOTは開幕した。会館ホールをはじめ訪れたのであろう。施設の広さと古さに学生が感嘆の声を上げていたのが印象的であった。また毎回酸素吸入器持参で駆けつけるお年寄りの姿も心に残った。泣く、笑う、世代間で異なる反応も興味深かった。「番掛時次郎」遊侠一匹では、終幕とともに拍手する一般参加者につられるように学生も拍手した。期間中フィルム切れや機器の故障、雑音等およそ考えうるひととおりのトラブルを経験しながらも、予想外の参加者を得てWOTは終了した。苦情も「フィルム切れ? 昔を思い出す」という感慨であったり、「せうかくいものをしているのにあまり知られていない!」という励ましに近いものがほとんどだった。「京都の文化史に残る二カ月でした」(京大「同志社は課外プログラムが充実していてスゴイ」)(立命)と他大学生の評判も概して高いものだった。

ところで、同志社の会館といえば、かつて京大の西部講堂とならぶ京都の学生文化の拠点であった。大学は大学会館と呼び、学生は学生会館(通称「ガカン」)と呼ぶ。大学も気をつかって「会館と呼んでいるところがいかに同志社らしい。『学生時代ガッカンにはよくお世話に



「サラスヴァティ3コンサート〜無国籍ライブat同志社」1999/7/1



なりました。ここに来れば何かやっているし、下には安い食堂がありましたからね」とは京都府立医大生だった映画監督の大森一樹氏の回顧談である。氏もWOT企画の趣旨に賛同し、講演を快諾してくれた講師の一人である。春の「無国籍ライブ」の岡本博文さんも軽音のOBでガツカンから巣立っていったプロ・ミュージシャンの一人である。同志社の卒業生、ことに「団塊の世代」には「ガツカン」という言葉の響きに独特のノスタルジーを感じる向きも少なくない。

実験的な一年を終え二年目を迎えるWOT。目指す本日のゴールとは何か。必ずしも最初から明確だったわけではない。企画を実施する中から次第次第にそれは明らかになってきた。八千五百人を超す観客動員がもたらす拠点としての「WOT効果」がそれだ。たとえば「雅楽会」は毎年十二月、会館ホールで定期演奏会を行っているが、例年少ない参加者に対して、今回は二百人もの来場があったという。一般来場者がかなりの部分を占めたことから、精力的に情宣を行った会員の努力もさることながら、WOTでのピラマキが集客につながったと考えられる。WOTで案内をもらったという参加者の一人は次のように話す。「かねてから学生さんの企画に参加したいと思っていたが機会がなくて…。はじめて参加したがいいますね」「小劇場」や「交響楽団」も、WOTでの置きピラを開始しており、今後のWOT効果が期待される。学生課としてはこうした課外活動団体への協力も望むところで、WOTという「場」をむしろ積極的に利用してほしいとも考えている。七〇年代とは一味違った文化拠点としての新たなうねりは、いま始まったばかりだ。

What's on Thursdays! = WOT(ワット!) = 2000年度(春学期)企画 =

- 場 所 大学会館(烏丸今出川上ル西側)
●時 間 16:45~(1回目) 19:00~(2回目)
※は別時間帯になります。

【春学期】日本映画～新たな世紀への飛翔

…今、日本映画が大きな注目を浴びている。各国の国際映画祭では作風の自由さと質の高さで多数の若手監督の作品が喝采を浴び、中堅・ベテラン監督を含めて各国に例を見ないほどの層の厚さを誇ると言われている。「WOT」では、昨年度春学期に引き続き日本映画界の注目すべき監督の作品(新作)を中心に集めてみた。力作・人気作のみならず、関西では見る機会の少なかった作品を含めて一挙に上映し、その多彩さを確認してみる。

Part1

新しい時代への扉1/日本映画ニューウェーブ

- 4月13日(木)「四月物語」(98岩井俊二)～松たか子主演(67min)
※上映時間 16:00~ 17:30~ 19:00~
4月20日(木)「がんばっていきまっしょい」(98磯村一路)
～田中麗奈主演(120min)
4月27日(木)「生きない」(98清水浩)～ダンカン主演・脚本(100min)

Part2

新しい時代への扉2/日本映画は多様な形態に解放されていく

- 5月11日(木)「双生児」(99塚本晋也)～本木雅弘主演(84min)
5月18日(木)「ユメノ銀河」(97石井聰互)～浅野忠信主演(90min)
5月25日(木)「ワンダフルライフ」(99是枝裕和)
99ナント三大映画祭グランプリ(118min)
6月1日(木)「M/OTHER」(99諏訪敦彦)
99カンヌ映画祭国際批評家賞(147min)
※上映時間 16:00~ 19:00~



▲がんばっていきまっしょい



▲ユメノ銀河

Part3

日本映画のドラマとアート/進化する中堅監督たち

- 6月8日(木)「大阪物語」(99市川準)
～沢田研二・田中裕子・池脇千鶴(120min)
6月15日(木)「愛を乞う人」(98平山秀幸)
98モントリオール映画祭国際批評家賞(135min)
※上映時間 16:00~ 19:00~

Part4

21世紀日本映画の牽引者～日本映画界最強の2人=北野武vs黒沢清

- 6月22日(木)「あの夏、いちばん静かな海」(91北野武)
～真木蔵人主演(101min)
6月29日(木)「大いなる幻影」(99黒沢清)
～99ベネチア国際映画祭招待作品(95min)
15:00より学内で黒沢清監督の講演会を予定しています

Part5

サマーコンサート

- 7月6日(木)『ノスタルジック・ナイト』※18:00開演
♪哀愁のポルトガルギター&マンドリン♪
出演:マリオネット

ゼミのために一週間はある(?)

～ディベートに耐え、法的思考力を養成する～

現在、男子15人(文部省給費アメリカ人留学生M.Griederさんを含む)、女子10人の3年次田井ゼミでは、田井教授手作りの問題を題材にして、民法の条文と判例などを素材に、法律の討論を展開している(ちなみに、4年次生は18人在籍)。

一つの問題に約1カ月かけて準備をした担当班が司会・進行役を務め、そこに内在する問題点について議論する。授業中、先生からの鋭い指摘や他説からの批判がなされるという緊張感の中で、事前に考えてきた自説を言葉に表現し、相手を納得させることの難しさを日々痛感している。

一方、ゼミの時間以外では「六法持込不可」のゼミ旅行やコンパをはじめとして、大いに盛り上がり、田井ゼミ独特の和気藹々とした雰囲気がある(ゼミ論も楽しい)。

る(ゼミ論も楽しい)。

昨年11月には日本大学法学部山川一陽ゼミ(3、4年次生、計17人)を本学に招き、至誠館会議室にて長時間にわたる対抗ゼミを行い、新たな交流関係を作ることができた(山川教授は元東京地検特捜検事で民法専攻。田井教授とは'97年韓国で開催されたアジア家族法三国会議で意気投合し討論会の話がまとまった)。

取材当日は、詐欺行為取消権に関する下記の問題を検討中であった。

法学部法律学科
「田井義信ゼミ」三年次



田井 義信
【法学部法律学科教授】

◀日本大学山川ゼミとの法律討論会の模様をスライドショーに収録したCD-ROM



「問題」

特定物債権者は特定物の引渡請求権を保全するために取消権を行使することができるか。また、その物を自己に直接引き渡すように請求することができるか。

担当班 B

名免良 正明さん

佐々木 理恵さん

渡辺 恵美さん

水島 太一さん

福田 健太郎さん

西村 雅宏さん



担当班●詐欺行為取消権の法的性質については形成権説、請求権説、折衷説、責任説訴権説がありますが、各説につきましては前回すでに説明させて頂きましたので、今週はその続きから始めたいと思います。皆さんにはいずれの法的立場に立つのか答えていただいた後、討論に入りたいと思います。形成権説は取消後の目的物の処理に問題があり、強く支持をされる方がいらっしやなかったので、請求権説の立場に立つ坂越君から見解を述べてください。

坂越●僕は、債務者Bの行った詐欺行為によって責任財産の譲渡を受けた受益者Cに対し、債権者Aは逸出した財産の返還を請求できると思います。

担当班●BとCの契約は有効だとすると、第三者に過ぎないAがなぜ関係のないCに返還請求できるのでしょうか。

坂越●BとCは取引の正当性を主張するかもしれませんが、請求権を有する債権者Aにおいてはこの取引は無効であり、目的財産の返還が請求できるはずです。

田井●では、請求に応じて、受益者Cが返還したとしましょう。でも、債務者Bはそれを素直に受領するでしょうか。どうせAに持っているものならBは受け取らない可能性がありますね。

坂越●確かにこの場合は被告はCであり、Bに強制的に受け取らせる効力はないですね。担当班●債権の請求権を棚上げし、債権者Aと受益者Cの取引の無効のみを主張する形成権説と、坂越君のいう請求権説の良いところ取りをしたのが折衷説ですが、これを支



持する岡本君の意見はどうですか。

岡本 ● 形成権説に基づく取消は法的にすつきりしますが、給付義務の実効性に課題を残します。それなら形成権でB・C間の法律行為を遡及的に無効にした後、請求権説に基づいてCに給付義務を履行させる方が合理的だと考えます。

担当班 ● 二つ問題があると思います。一つは形成権は形成訴訟で、請求権は給付訴訟で裁判が行われるわけですが、形成権と請求権という性質の異なるものを一つの訴訟で行える根拠を明らかにして欲しいですね。もう一点は、折衷説では請求権説と同様、被告はC、原告はAで、債務者Bは裁判の蚊帳の外に置かれます。なのにBはその判決の責任をなぜ負わなければならないのでしょうか。岡本 ● 詐害行為は、もともと取消と請求という異なる権利の行使をともに有しているからです。

田井 ● 民法四二四条には「取消の権利を有する」とだけ書かれていますが、岡本君は拡大解釈をして、請求権も主張できると割り切るわけですね。では、担当班が質問したように、当事者でないBになぜ既判力が及ぶのでしょうか。

岡本 ● 四二四条の目的は、債務者BのAに対する弁済能力の保全であって、受益者Cの「詐害の意思」が証明できれば、その目的は達せられることとなります。

田井 ● では、債務者Bと受益者Cの契約の効力はどうなるのですか。

担当班 ● 坂越君、岡本君がともに答えに窮しているのは、請求権説と折衷説双方の特徴

である「相対的効力」の説明が十分になされていないからだと思います。この問題は難問です。で時間の関係で次回にお二人に答えたいたくとして、責任説を採る西村君の意見を伺います。

西村憲 ● 民法四二四条は強制執行の前段階を整える意義をもった条文です。ですから債務者Bの責任財産を保全するという目的を果たせばいいのです。その関係でいえば、Aの債権と弁済に充てるBの財産との間でのみ成り立つ関係ですから、Cが譲渡を受けた目的物にはあっても抵当権が付いたがごとく、Aは強制執行が可能になります。

中野 ● 訴権説も同じような結論になるわけですがなぜ訴権説を採らなかったのですか。西村憲 ● 逆に尋ねたいですね。なぜ中野君は責任説でなく、訴権説なのですか(笑)。

中野 ● え、僕が答えるんですか。そもそも詐害行為取消権の規定はフランス民法に由来します。それならフランス法にある訴権という概念を持ち込むことができるわけで、訴権説も責任説と同じく、形成訴訟によるのではなく、執行認容訴訟により詐害行為の取



消を提起し、かつその勝訴によって受益者Cに対し強制執行をかけることができます。

西村憲 ● 民法四二四条は実体法の規定です。それなのに、訴権という概念を持ち込むと訴訟法の議論になってしまいます。その点で僕は疑念を持ちますね。

田井 ● 西村君の責任説には責任的無効という弱点があるようですね(笑)。君の主張はわかった。しかし、論理の核心となる責任的無効の概念については、日本の民事訴訟法にはどこにも書かれていない。フランス民法にもない。ところがドイツにはあるんですね。さあどうするか。担当班はどう乗り切るのでしょうか(笑)。

担当班 ● 今日時間は時間がなく、結論が出ませんので、次回に民法一七七条と四二四条の関係について検討したあと、再度この問題を取り上げます。皆さんよく勉強してきてください(一同ヒュー)。

読者のみなさんへ

田井ゼミは毎年、卒業生の集まりである曳航会総会の開催と曳航会誌(約100ページ)の発行を行っています。

私達の回生は20期生にあたります。ゼミには、先輩法曹をはじめ、多彩な方が講演に來られます(昨年は、奥田昌道現最高裁判事にも来て頂きました)。

ゼミは開放的で来客歓迎ですので、興味をお持ちの方は、是非一度ゼミにいらっしやいませんか?

(三年幹事・河本京子)



悲喜こもごもの留学体験で つかんだものは？

高校時代からの学友であり、サッカー仲間であった山本さんと森川さんが時を同じくして留学に旅立った。しかし、その環境は大きく異なっていたようだ。地球の裏側で学ぶ友人を思いながら二人は何を感じ、何をつかみ取ったのだろう。

森川 ● 僕の留学先はネパールのトリブヴァン大学だった。多分最初の交換留学生だったからだろうけど、大学側の情報にも限界があって結局事前にネパールを訪れ、下宿先など自分の目で確かめてきた。それでも、新学期が始まるはすの九月になっても、祭りやらで一向に授業が始まる気配がない。日本人の感覚としては、すべてがシステムチェックじゃないんだね。

山本 ● 僕の場合は、留学というより海を越えたインターンシップだった。カナダのマントバ州にある電力会社や大学機関出資の研究機関で研究員として働いてきた。先生に推薦いただいただけあって、環境は実に恵まれていて、日本の二倍は勉強がはかどった感じがした。

森川 ● 山本君が最良の環境で勉強していた頃、僕は奇る辺ない異国で、ひとりもがき苦しんでいたわけだ。君には話してはなかったかもしれないが、機械工学専攻の大学院生でありながら、せかく世界一美しい自然が息づくネパールに行くのだから、環境学の観点から森林について学ぼうと目論んでいた。ところが病気で、すべてが水泡に帰してしまっただけだ。

山本 ● 写真を送ってくれたが、本当に美しい写真ばかりで、その頃君がA型肝炎で倒れ、ベッドの上でうめいていたとは想像できなかったなあ。森川 ● 肝炎にかかったのはネパールに滞在して

七カ月目くらいで、結局四十日間ほどで生活するはめになつた。
山本 ● 二人とも準備不足がたつたということかなあ。

森川 ● それは、山本君にも苦労があったというところ？

山本 ● 話してはなかったけれど、最初の三週間は僕もきつかった。知つての通り、留学が決まつたのが突然だったので、英会話の勉強が十分できていなかった。カナダに着いてみると相手の話していることがまったく理解できない。あわてて勉強を始めたけれどストレスがたまる一方で、しばらくは人に会うのが怖かった。ところが研究生活が始まってみると、不思議なくらいストレスが吹っ飛んでいった。要するに学問に関しては、世界共通なわけで、英語の専門用語は論文ですべてにお馴染みだから問題はな。日本に近い感覚で研究活動に入り込めた。
森川 ● 僕の場合は、最初から生活の中でネパール語を学んでやろうと決めていた。言葉は、現地人のメンタリティと一緒に学んだ方が絶対に早いからね。これが幸いしたのか、言葉を超えた心の交流ができたと思う。とくにバスで知り合い、宿の世話までしてくれたおさんは、もし彼がいなければ今の僕はないといつてもオーバではないほど、病床の僕の面倒をよくみてくれ



森川 将名さん
【工学研究科機械工学専攻
博士課程(前期)】2年次生

1998年8月から翌年4月まで、外国協定大学交換留学生としてネパールのトリブヴァン大学へ留学。5月ネパールに入り、11月にA型肝炎にかかり現地で闘病生活後、いったん帰国。その後期間終了までトリブヴァン大学で学ぶが、森川さんの留学体験は、生活面での収穫が大きかったようだ。

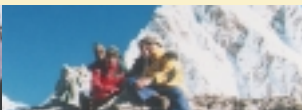


山本 和男さん
【工学研究科電気工学専攻
博士課程(前期)】2年次生

1998年5月から翌年4月まで、カナダのウニェバグにあるManitoba HVDC Research Centreでインターンシップを経験。指導教授の雨谷昭弘教授の影響を受け、ぜひ海外留学を、と心に秘めていたという。今春から国立奈良工業高等専門学校で助手の職に就き、これからの学生に海外への道を聞きたいと語る。

(学年は収録時)

た。アジアが好きでよく旅をしたけれど、僕はどこかで先進国からきた旅人として傲慢さを隠し持っていたのだと思う。彼を通じて初めて、気持ちの通い合うアジアの友人を得た心境だ。
山本 ● それは貴重な体験だったね。僕には、森川君のような出来事は何も起こらなかったけれど、素晴らしい環境と研究施設で自分の研究テーマを追求できたのは何より幸せだった。このような環境を与えて下さった雨谷教授に感謝しています。カナダは水力に恵まれた国で、それを利用して発電した電力を遠くアメリカにまで送電している。したがって、高圧直流送電の技術に関しては、期待通り世界のトップレベルにあった。
森川 ●僕は山本君のように初志が貫徹できなかった。森林学の研究も、結局断念せざるを得なかったけれど悔いはない。それより、こうした貴重な体験を積み重ねてくれた留学に、感謝したい。
山本 ●同志社大学で学ぶ人なら、現地に行けば英語は何とでもなる。学びたいことは、はっきりとした目的があるのであれば、語学を壁だと思ふのではなく、思いきって海外へ飛び出して欲しいと思う。



CAMPUS NEWS

キャンパスニュース

今出川校地 「扶桑館」の 改修工事が完了

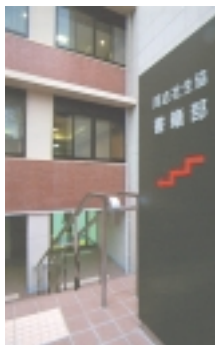
昨年来続けられてきた今出川校地
扶桑館の改修工事が無事終了。

扶桑館は、長年工学部の機械系・化学系実験棟として親しまれてきたが、工学部の京田辺校地への移転にともない、新たな用途が検討されてきた。改修した扶桑館は、エントランスのデザイン変更によりイメージを一新、高度情報化時代に対応した施設として新しい姿を現した。

四月から使用が始まるが、その概要を説明すると、一階は全学共通利用の演習室および教室、二階はグロブアルセミナー室やマルチメディアルームなどフロンティア推進事業の研究施設およびワールドワイドビジネス研究センター事務室、三階から五階は、主に法学部、経済学部、商学部の演習室として使われるが、五階にはマルチメディアルーム、コラボレーションルームを設置した。



また地階には、大学会館内にあった生協書籍部が移転、エントランス南側の階段から出入りができる。階段前は、防火貯水池を取り込んだフレイロットになっており、憩いの空間に生まれ変わっている。



本学大学院生が 第十五回電気 通信普及財団賞 を受賞

総合政策科学研究科の橋本誠志さん（博士課程（前期）二年次生）と井上明さん（博士課程（前期）二年次生）、本村憲史さん（九八年博士課程（前

期）修了の共同論文「ネットワーク上の情報統合に対するプライバシー保護システム」が、「第十五回電気通信普及財団賞」を受賞した。財団法人電気通信普及財団が主催する同賞は、電気通信を社会科学のな見地から研究した優れた論文に与えられる。学生の部と一般の部に分かれ、毎年多くの応募があるが、今回の三人は学生部門での受賞となった。

授賞式を前に、橋本さんは「まず政治学の立場から本村さんが、情報ネットワーク化社会の中で無防備にさらされたプライバシーの問題に着眼。法学の視点から私がプライバシー保護法制の未整備な現状を分析し、井上さんがいかに個人情報保護の統合が容易かを技術的に実証してみせましたと論文完成までの経緯を説明してくれた。技術面を担当した井上さんは「たとえばインターネットの個人認証システムと



して普及しているソフトウェアにGoogleがあります。これは米国のドメイン構造を想定したもので、日本でGoogleを使って取得した個人情報はずねに第三者に侵害される危険をはらんでいますと警鐘を鳴らす。最後に、インターネットを使い始めた時からプライバシーの危機を直感したという本村さんが「今回の論文は、私の研究をベースに、橋本さんが法律面から井上さんが技術面から補筆し、完成させてくれたもので、さまざまな専門分野の研究者が集まる総合政策科学研究科らしい成果だと思っています」と結んでくれた。

本学学生らが 単行本を出版

任意団体「同志社大学でES2元編集長の玉木剛さん文学部英文学科四年次生」が、編集仲間や東京・名古屋の雑誌サークルの同志とともに、現在活躍中の若者十八人のインタビューをまとめた単行本『モラトリウムで歩き出そう―大学時代を楽しむための18のデキスト―』を出版した。玉木さんらは、まず本の趣旨や内容を企画書にまとめ、浅野健一文学部教授に相談、現代人文社という出版社を紹介してもらい発刊のチャンスを得た。

この本に登場する人物は、いずれも

大学在学中にその活躍が目まれ、脚光を浴びた同年代のOB・OGたち。本学経済学部在学中でサッカード22日本代表主将・宮本恒靖さん、ウルトラクイズ優勝者・小川圭太さん、俳優・ミュージシャンの藤木直人さん、長野オリンピック・金メダリストの里谷多英さん等々。彼・彼女たちがいかにして自分のやりたいこと、自分を生かす道を見つけたのかという自己実現のプロセスがリアリティーのある言葉で語られている。「今の大学生は、何かにつけ元気がないと言われます。それはきっと、自分がやりたいことが見つからず、無為に四年間を過している学生が多いからではないでしょうか。自分たちと変わらない学生でありながら「何か」を掴んだ十八人の大学時代を綴るこの本は、自分らしく悔いのない学生生活を送るための、何らかのヒントになるはず。日常に物足りなさを感じている学生、これから大学をめざす人たちにぜひ読んでほしいと玉木さんは語る。

この本は四月初旬、全国の大学生協

書籍部、一般書店にて発売される予定



同志社大学同法会主催による 学生討論会 「第二回新島襄 記念法律討論会」



去る三月十一日、今出川校地にて本学同法会主催による「第二回新島襄記念法律討論会」が開催された。この討論会は、同志社大学、慶應義塾大学、早稲田大学の三大学の法律研究サークルの学生らによって設立され、今年で五年目を迎える。昨年度から、本学同法会が主催を務めることにより「新島襄記念法律討論会」と名称を変更、新たな進展を期して、第二回目にあたる本大会では、当初の三大学に、中央大学、関西大学、立命館大学、関西学院大学、大阪大学、神戸大学の六大学を加えた九大学が参加。審査員に専門の学者の方をはじめ、地方裁判所判事補、地方検察庁検事、弁護士とい

った法曹関係者を迎えるなど、大規模で充実した内容の討論会となった。大会では、出題される法律問題をテーマに、学生が立論者として自分の意見をスピーチ。質問者である学生と意見交換を行うディベート方式で進められる。今回は、出題者に関西大学法学部教授・月岡利男先生を迎え、民法からの出題（土地賃借権問題）について、さまざまな議論による熱戦が繰り広げられた。

本大会の実行委員長である永田恭史さん（法学部法律学科二年次生）は、「大会は、自分の考えを意見として主張できる法学的・論理的思考力を身につける貴重な経験の場であり、また同志の仲間との交流のチャンスと話す。通常の授業や机上の勉強では培うことができないプレゼンテーション能力を高めることが目的である本大会。法学を志す学生たちの普段の勉強の集大成を競い合う場として、今後はさらに全国規模で拡大していきたいと語る。



ANNOUNCEMENT

アナウンスメント

新任教員紹介

●今年度新たに十七人の先生方をお迎えします。

①氏名 ②所属(学科) ③職名 ④最終学歴
⑤主な担当科目

- | | | | | | | |
|--|---|---|---|--|---|---|
| 
① 山田礼子
(やまだ れいこ)
②文(文化) ③助教授
④カリフォルニア大学大学院教育学研究科 ⑤原典講読英書・他 | 
① 庭田茂吉
(にわた しげよし)
②文(文化) ③助教授
④同志社大学大学院文学研究科 ⑤哲学基礎演習 他 | 
① 林 克樹
(はやし かつき)
②文(文化) ③専任講師
④同志社大学大学院文学研究科 ⑤哲学基礎演習 他 | 
① 川口恭弘
(かわぐち やすひろ)
②法(法律) ③教授
④神戸大学大学院法学研究科 ⑤商法総則・商行為法 他 | 
① 市川喜崇
(いちかわ よしたか)
②法(政治) ③助教授
④早稲田大学大学院政治学研究科 ⑤行政学 他 | 
① 谷本 啓
(たにもと あきひろ)
②商(商) ③専任講師
④同志社大学大学院商学研究科 ⑤人的資源管理論 他 | 
① 笹岡秀一
(ささおか ひでいち)
②工(電子工) ③教授
④京都大学大学院工学研究科 ⑤通信理論 他 |
|--|---|---|---|--|---|---|

＜秋学期から＞

- | | | | | | | | |
|--|---|---|--|--|--|--|---|
| 
① 鈴木良始
(すずき よしじ)
②商(商) ③教授
④北海道大学大学院経済学研究科 ⑤比較企業論 他 | 
① 村田晃詞
(むらた こうじ)
②法(政治) ③助教授
④神戸大学大学院法学研究科 ⑤特殊講義 他 | 
① 高 榮珍
(たか へいじん)
②言語文化教育研究センター ③専任講師 ④延世大学大学院国語国文学科 ⑤ハングル | 
① 崎田智子
(さきた ともこ)
②言語文化教育研究センター ③専任講師 ④京都大学大学院人間・環境学研究科 ⑤英語 | 
① 中村艶子
(なかむら つやこ)
②言語文化教育研究センター ③専任講師 ④モンテレー国際関係大学院通訳訳学研究科 ⑤英語 | 
① 和泉真澄
(いずみ まさみ)
②言語文化教育研究センター ③専任講師 ④クイーンズ大学大学院政治学研究科 ⑤英語 | 
① 満畑 潔
(みぞはた きよし)
②工(機能分子工) ③助教授
④京都大学大学院理学研究科 ⑤解析学Ⅰ 他 | 
① 出口博之
(でぐち ひろゆき)
②工(電子工) ③専任講師
④同志社大学大学院工学研究科 ⑤電波工学 他 |
|--|---|---|--|--|--|--|---|

退職教員紹介

●二〇〇〇年三月三十一日付で次の先生方が退職されました。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-----|--------|------|-------|-------|-------|-----|-------|------|-------|-------|--------|------|----------------|------|----------------|-------|----------------|-------|----------------|-------|----------------|-------|-----------------|
| 天木志保美 | 文学部教授 | 片山 壽昭 | 文学部教授 | 川島 秀一 | 文学部教授 | 畑 肇 | 法学部教授 | 嶋田 敬介 | 法学部教授 | 柏 博 | 経済学部教授 | 門脇 彰 | 商学部教授 | 西口 章雄 | 商学部教授 | 島 弘 | 商学部教授 | 西岡 一 | 工学部教授 | 佐藤 昌史 | 工学部助教授 | 松本 勤 | 言語文化教育研究センター教授 | 岡田 妙 | 言語文化教育研究センター教授 | 大泉 昭夫 | 言語文化教育研究センター教授 | 吉村 宏一 | 言語文化教育研究センター教授 | 吉岡 健一 | 言語文化教育研究センター教授 | 宇田 佳正 | 言語文化教育研究センター助教授 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-----|--------|------|-------|-------|-------|-----|-------|------|-------|-------|--------|------|----------------|------|----------------|-------|----------------|-------|----------------|-------|----------------|-------|-----------------|

●清水征樹 法学部教授は、昨年十月十九日にお亡くなりになりました。

第二十一回 外国文化週間

二〇〇〇年度テーマ

『ボビュラー・カルチャー』

春秋映画祭「世界のアニメーション」

期間：四月二十四日(月)～二十八日(金)

会場：京田辺キャンパス

入場：無料、一般公開

主催：言語文化教育研究センター

●ビデオ『攻殻機動隊』 押井守監督

日時：四月二十四日(月) 十五時

場所：恵道館三〇二教室

●フィルム『ロジャー・ラビット』

ロバート・ゼメキス監督

日時：四月二十五日(火) 十五時

場所：多目的ホール

●講演『アニメーションの技法と可能性』

山村浩二氏やマムアアニメーション代表

取締役、日本アニメーション協合理事

ビデオ『あめの日他』 山村浩二監督

『自然の歴史他』

ヤン・シユワンクマイエル監督

『ホナールソング他』

ジェラルド・ユーン監督

日時：四月二十六日(水)

講演十五時、映画十六時

場所：恵道館三〇二教室

●フィルム『風が吹くとき』

ジミー・T・ムラカミ監督

日時：四月二十七日(木) 十五時

場所：多目的ホール

●ビデオ『プリティッシュ・アニメーションアワード受賞作品集』

『プリティッシュ・カウシル提供』

日時：四月二十八日(金) 十五時

場所：恵道館三〇二教室

ビデオ上映会

○「新島襄の生涯」

日時：四月三日(月) 十七時

場所：明徳館一番教室(今出川キャンパス)

○「新島襄」

日時：四月六日(木) 十二時

場所：多目的ホール(京田辺キャンパス)

アッセンブリー アワイ

演題：「風と海とあくなき挑戦」

講師：兵藤和行氏(アメリカ杯フットボール)

チャレンジスクール、本学卒業生

日時：四月二十六日(水)

十五時～十六時三十分

場所：神学館チャペル(今出川キャンパス)

演題：「若者文化と伝統芸能(仮)」

講師：茂山千三郎氏(狂言師)

日時：五月二十二日(月)

十五時～十六時三十分

場所：ラウンジ棟会議室(二〇一)

(京田辺キャンパス)

学生課 (京田辺)

出会いと発見の場 函館キャンパスに あなたも参加 しませんか？

函館キャンパスは、同志社の創立者新

島襄が一八六四年幕禁を犯して脱国

した地、北海道・函館で、新島襄の生

き方を学び、同志社を見つめ、人と人

との出会いやふれあいのなか、自己を

省みようという趣旨で行われます。

参加者は教職員スタッフと共にグル

ープを編成し、脱国の碑、訪問、デイス

カション、フィールドワークなどのプロ

グラムを自ら企画運営し独自のキャン

プを作り上げます。過去の参加者か

ら「学生生活最高の思い出ができた」

「学部・学年を超えた友人ができた」

といった声が寄せられるこの「函キャ

ン」にあなたも参加しませんか？詳細

は四月下旬、掲示板でお知らせします

が、今年は青森県風間浦村から船で函

館入りするルートを検討中です。

期 間：八月十七日(木)～二十一日(月)

(四泊五日) 現地解散

場 所：函館市青少年研修センター他

募集人数：男女各十五人 計三十人

参加費用：二万六千円(予定)

スタッフ：教職員三人(予定)

学生課 (今出川)

新入生歓迎 特別講演会

演題：「スポーツに学ぶ(仮)」

講師：セルジオ越後氏(サッカー解説委員)

日時：四月六日(木)

十五時三十分～十七時

場所：多目的ホール(京田辺キャンパス)

*講演会に先立って、同志社交響楽団

による演奏会が十五時から行われ

ます。

学生課 (京田辺)

体験プログラム(仮) 実施のはこびに

「自然の中で思いっきり活動してみ

たい」「先生や仲間とじっくり話してみ

たい」「以前からやりたかったことをぜ

ひ体験してみたい」——こんな思いを

抱く人のために、二〇〇〇年度、学生

課では「先生」「仲間」「体験」をキー

ワードに、新たに三つの体験プログラム

(仮)を発足させる予定です。具体的な

内容は未定ですが、各プログラムとも

三十人程度の募集になる見込みで、詳

細は四月下旬に学内に掲示予定です。

説明会等は、函館キャンパスとあわせて

行いますので、「函キャン」を含めて四

つのプログラムの中から、あなたに合

ったものをセレクトしてください。

学生課 (今出川)

春学期 奨学生募集と 学費の延納・分納 について

■二〇〇〇年度春学期奨学生募集

【学部】日本育英会奨学金

◎出願期間

【京田辺 四月五日(水)～十日(月)

二年次生以上

四月十七日(月)～十九日(水)

一年次生

【今出川 四月五日(水)～十日(月)

【大学院 同志社大学大学院奨学金

日本育英会奨学金

◎出願期間

【京田辺 四月五日(水)～十日(月)

【今出川 四月五日(水)～十日(月)

※出願受付はいずれも土・日を除く

※三月下旬より「奨学金出願のしおり」

を厚生課奨学係で配付しています。

■学費延納・分納

◎手続き期間 四月一日(土)～二十八日(金)

※厚生課奨学係で受け付けます。学

生証と印鑑を持参してください。

※期間内に学費を納入できない人は

必ず手続きをしてください。

日本育英会

きぼう21プラン奨学金

九九年度からスタートしたこの奨

学金は従来の第二種に比べ、学力・家
計基準とも大幅に緩和された国の有
利子貸与奨学金で九九年度の採用状
況は以下の通りです。有資格の希望
者全員が採用されています。

採用人数

(春期募集・秋期募集

学部 一年次 四七六 三〇人

二年次以上 三二一 五六人

大学院 前期課程 八二八 九人

合計 八六九 九五

貸与月額

次の四種類から希望月額を選択する。

学部 三・五・八・一〇万円

大学院 前期課程

五・八・一〇・一三万円

学力

標準的な成績で順調に単位を修得し、

学業を修了しうる能力のある人

家計

九九年度モデルケース家計

学部 家族年収約二、三五〇万円

以下 (父就労 母無職 本人

自宅外、弟公立高校の四人

家族の場合)

大学院 本人等 年収約五九五万円

以下

今まで日本育英会奨学金の有資格

者とならなかった人でも採用の可能

性があります。返済総額や必要性の

ことを十分考えたうえ出願ください。

日本育英会
緊急・応急採用について

失職、破産、会社の倒産、病氣、死

亡等または火災、風水害等による家

計急変により経済的困難が継続する

と見込まれる者は緊急(第一種)・応

急(きぼう21)採用の対象となります。

ただし、その事由が発生した時からお

おむね一年以内に限りします。九九年

度は四十五人(十二月現在)が採用さ

れています。

医療費等援助基 金(仮称)の事業 について

大学は二〇〇〇年三月三十一日を

もって解散した同志社大学学生健康

保険・組合の残余財産の寄付を受け

て「医療費等援助基金(仮称)」を創設

し(大学への寄付および基金創設は組

合の精算業務終了後になります)、二

〇〇〇年四月一日以降、下記の一定

の組合事業を引き継いで行います。

本学学生および大学院生(科目等履

修生、聴講生、外国人留学生特別学生、

留学生別科生、大学院研究生は除く)

は下記事業の適用を受けることがで

きます。

不明な点は学生部厚生課にお問い

合わせください。

■厚生館保健センターで受診

保険診療の自己負担分は大学が負

担します。保険診療の場合は、厚生館

保健センター窓口での支払いは必要あ

りません。受診に際しては、学生証、

健康保険証または健康保険の遠隔地

被扶養者証が必要です。

■学外医療機関で受診

傷病のため学外医療機関で受診し

た場合、保険診療の自己負担分が一

カ月あたり三万円を超えた部分の金

額(高額療養費六万三千六百円を限

度)を支給します(複数の医療機関の

合計金額でもかまいません)。保険適

用による調剤薬局・柔道整復師施術・

針灸・装具についても対象となります。

該当する場合は所定の申請書に医

療機関の領収書(保険診療金額が明記

されているもの)を添付して、学生部

厚生課に申請してください。

また、上記申請が三カ月以上連続

した場合「療養支援金」一万円を一学

年度に一回限り支給します(「療養支

援金」の申請手続きは不要です)。

■その他の事業

歯科検診：五百八十人分の歯科検診

を行います。

ヤニ検査：千人分のたばこのヤニ検査

を行います。

僕は「葉っぱ」かな

ある学生から「先生、これケコウ面白いです」と、一冊の絵本を薦められた。絵本や童話は子供向きのものであって、そんなのはもうとくに卒業したという人も多いだろうが、大人が読んで楽しめる絵本や童話は少くない。いや、多少の人生経験を積んでから読む方が深い味わいを引き出せる作品もあるのだ。あつて、たとえば、サンテグジュペリの『星の王子さま』は、そのような一冊にあげることができよう。絵本や童話は一般にストーリーが単純であるためか、かえって読者の想像力に訴えるところがあり、読者と著者との対話が成り立ちやすく、人生についての様々な考え方を紡ぎ出す手がかりとなってくれるのである。

彼が薦めてくれたのは、バスカリーヤ葉っぱのフレディーいのちの旅であった。ある公園でのこと、春に芽吹いた小さな葉っぱは、近くの仲間たちと一緒にぐんぐん成長してたくましくなっていく。春風の心地よさを身に受けて育ち、夏は夕立にさざりりと体を洗

い、木立のまわりに気持ちいい日陰を作っては人々に喜ばれる。時には小鳥が訪れ、夜には星の光を眺める。そんな日々のもと、秋風が吹くころ、葉っぱは色づき、やがて一枚ずつ散り果てて行く。葉っぱのフレディーは、自分も冬の来るころには木から離れ落ちていかなければならないことを知り、おそれ悩み、悲しむ。つまりこの絵本のテーマは「死」であるが、著者は葉っぱ一枚を主人公に仕立て、その苦悩や友達との話を通して、この重い問題に解決を見出そうとする。

かつてわたしは田辺で、多くの学生諸君に「あなたがこれまでに経験した最も悲しい事件は何でしたか」という質問をしたことがある。そのダントツ一位の答えは、飼っていたベツト（おもに犬の死であり、親族の死ははるかに少なかったことを憶えている。今や日本は高齢化の長寿社会となり、二十歳前後の

若者には家族との死別を経験する機会が減少していることは喜ぶべきことであるが、わたしたちが立ち向かわなければならぬこの大きな問題——人生を深く考え、命の尊さを教えるような問題——に、きちんと接し、しっかりと受けとめることは、人格の成長という点から大切なことである。

この絵本に批判したい点がなくもない。たとえば葉っぱのフレディーは、木から離れて大地に帰ることを一つの大きな「いのち」の過程に過ぎないと考えるのだが、それは実は救いではなく諦念というものであろう。またわたしたち現代人は、著者の言う「永遠に生きるいのち」に共感できるだろうか。ともあれ、発行部数が今や百万部に迫る勢いのこの絵本は、子供だけでなく大人たちにも癒しの作用を及ぼしているのであらう。わたしはこの絵本に納得できない疑問を持ちつつ、それとの対話を楽しんでいる。



橋本 滋男

【神学部神学科教授】

1935年神戸生まれ。同志社大学大学院神学研究科で修士、プリンストン神学大学で博士を取得。1972年同志社大学に入社。専攻分野は新約聖書学。著書は『イエスとマタイ福音書』など。

新米教師の雑感

北の方に見える山々が、うっすらと白く雪化粧をしているのを研究室から眺めると、京都で仕事をするのも悪くないなと思います。適度の都市性と伝統ある文化、そして山河の風景がバランスよく同居しているこの街で、気持ちよく過ごしています。夏には少々閉口しますが、正直、出張で東京に行くと、少々息が詰まる感じも最近はそののです。

昨年の四月に同志社で教えるようになって、初めての一年が過ぎようとしています。生まれは千葉でこれまでそこから離れず、ここ十年近くも東京の学校に通っていたので根っからの関東の人間ですが、縁あって新任教員としてこちらにやってきました。慣れましたかと聞かれれば、まだ慣れていませんとしばらくは答えることにしているのですが、これまで関西出身の人間が周囲に多かったこともあり、実はそれほど違和感はありません。河原町周辺には学生時代の恥ずかしい思い出もいくつか埋まっています。一人歩くと感傷的な気分になることもあります。ただ、慣れていないことといえば、生まれて初めて本格的に立つことになった教壇です。新米の教師の感想などを書き連ねて、この稿を埋めたいと思います。

新米教師の朝は早いです(なぜなら夜中から起き続けているからです)。要領が悪いこともあるのですが、慣れない大舞台が毎週続き、準備の時間はいくらあっても足りません。大学の講義の仕方など誰にも教わったこともな

く「指導要領」もないので大変な日々が続きます。資料を積み上げ組み立てを考え、コンピターでプレゼンテーションを準備し、必死の思いで学生の前に立ちます。私の講義に出席していた人のうち、もっとも勉強していたのは自分であつたことに、幸か不幸か疑問の余地はありません。その週の講義が終わる、ほつとしていると雑務のあとにまた次の週がやってきます。これの繰り返しです。

私の研究と意見を話せばいいだけなら案ですが、力不足から数回で終わってしまうでしょう。担当している科目の全体像に体系を与え、多様なものの見方を伝えようとする(大学教育の大きな目的はこれだと思えます)、依つて立つのは少々悔しいことに結局自分が先生たちから教わってきたことであることに気づかされます。学生時代は大方の人と同じように、大学の授業に不平などと言い、研究者にならなうたで、既存の研究の問題点を指摘し自分の研究の価値を主張している

わけですが、一方で講義をしてみると、学問がどれだけ多くの人間によつて積み上げられてきたかを改めて実感します。批判をしつても、それが自分の頭に染みみついていることも。私の先生たちがそうしてきたように、私も自分の受け継いできたものに新しくつけ加え、それを書き換えて次の人に渡すことができるでしょうか。きつと長く続く苦闘はまだ始まったばかりです。毎週続く講義の背景には、遠い昔から続く知識の積み重ねと、現代の問題や最新の研究とのこんな接触がいつも存在します。どうぞ学生の皆さんも、単位を揃えること(その期間限定の熱意も、教師になつて改めて実感したこと(一))ばかりを気にかけ

るのではなく、この知的な営みを多少なりとも体験してもらえば、と願っています。社会に出れば、めまぐるしく動く目の前の現実に向面することになるでしょうが、現象の底にある「本質」の理解のために、このような体験がきつと役に立つと思うのです。



柴内 康文

【文学部社会学科専任講師】

1970年千葉市生まれ。1994年東京大学文学部卒業。1999年東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程単位修得、1999年から現職。専門は社会心理学、コミュニケーション論。著書(共著)に『ネットワーキング・コミュニティ』(1997年東京大学出版会)など。
[<http://maple.doshisha.ac.jp/>]

「母と娘」

その永遠のつながり

ふた昔ほど前、「ルーツ」という番組が脚光を浴びた。アメリカの黒人男性が、自分の先祖を探しだし、その足跡をまとめた物語である。人は誰でも自分のルーツを知りたいという欲求を持っている。父母はどういう時代に生きたのか、祖父母は、その両親は…。そして自分は何者なのか。それは永遠の課題である。

この映画の主人公ホーテンスは、大学を卒業後、検眼師として働く自立した黒人女性である。彼女は養母の急死をきっかけに実の両親を捜すことを決意した。イギリスでは法律が改正され、現在では養子が実の両親を知る権利が確立されているのだ。ホーテンスは独力で

実母のシンシアを突き止め、驚愕する。なんと実母は白人だった。十五歳のとき、とある施設でホーテンスを産んだのである。

シンシアはロンドンの下町に住み、娘のロクサヌとアパートで暮らしている。娘は市役所の道路清掃係で、二人の生活は貧しい。シンシアの唯一の楽しみは、やさしい弟のモリスと会うこと。しかし、弟の妻とはうまくいかず、ストレスのたまる毎日である。そんなシンシアの前に、突然ホーテンスからの電話がかかる。遙か過去の、記憶の彼方からの



松川 真美

【工学部電子工学科助教授】

が子からの電話。シンシアは狼狽し、とっさに電話を切ってしまう。しかし、再び鳴るベルに、恐る恐る手を伸ばすのだった。この瞬間から、母と娘の人生が重なった。

初めて二人が会う日。待ち合わせの地下鉄駅でなかなか相手に巡り会えない。それもそのはず、シンシアは我が子の肌の色も知らなかったのである。ぎこちない出会いから仲の良い母娘へ。シーンも人気がないレストランから、にぎやかなカフェへ二人の仲を表すように変化していく。

そして、ロクサヌのバースデーを機会に、シンシアは家族みんなにホーテンスのことを告白するのだが…。

『秘密と嘘』

監督：マイク・リー
主演：フレンドラ・ブレッシン、ティモシー・スポール

この母と娘の出会いを縦糸に、シンシアとロクサヌの母娘関係や、キリス夫婦の不妊を横糸に、ある家族の人間模様が描かれていく。派手な演出はなにも

ない。マイク・リー監督はゆっくりと丹念にイギリスの下層階級の暮らしを追っていく。BGMは落ち着いた静かな弦楽器だ。その弦楽器も時折とぎれてしまい、舞台出身俳優の確かな演技が繰り広げられる。このゆきとどいた筆致、雰囲気はどこかで出会ったことがあるような…。

それもそのはず、マイク・リー監督は小津安二郎を敬愛しているのだそう。そして、この「秘密と嘘」は三年前のカンヌ映画祭で大賞を受賞した。

「本学教員の最新刊」

（学術情報センター調べ）

筆記用具のイギリス文学

小林順 ほか編 圓月勝博 執筆
晃波書房 二、〇〇〇円

転換期の刑法哲学【第2版】

アルトゥール・カフマン 著 上田健二 監訳
成文堂 八、〇〇〇円

戦争と軍隊（近代日本文化論10）

青木保 ほか編 安藤仁介 執筆
岩波書房 一、六〇〇円

言語都市・上海 1840-1945

真銅正宏 ほか著 藤原書店 一、八〇〇円

転換期の文学

（叢書転換期のフィロソフィ5）
木下康光 ほか編 ミネルヴァ書房 三、六〇〇円

手形法・小切手法2

手塚尚男 著 中央経済社 二、〇〇〇円

新事象学運動

小川侃 ほか編 田端信廣 執筆
世界書院 五、〇〇〇円

新約聖書の本文研究

B. M. メツガー 著 橋本滋男 訳
日本基督教団出版局 七、六〇〇円

チヨースターの言語入門

一音韻論・韻律論・形態論
ウド・フリリス 著 大泉昭夫 訳
開文社出版 二、八〇〇円

社会福祉士・介護福祉士のための

用語集（増補）
古川孝順 ほか編 小山隆 執筆
誠信書房 三、三〇〇円

二十世紀大衆音楽の 世界的展開

本書は、題名にあるように「ポピュラー音楽」に関する書物だが、決して通俗的な名曲・名盤解説書の類ではない。「ポピュラー音楽」は商品として売られるために作られた音楽であり、買い手が大量であるところにその本質がある。つまり、「ポピュラー音楽」は市場経済、マスメディア、大衆社会が完成した二十世紀に特有の現象」ということになる。

本書は、音楽と大衆、社会時代との関係のダイナミックな展開を追うことにより、今世紀を眺望し現代を読み解くという点で二十クなものとなっている。

ところで、日本に見られるように、現代のポピュラー音楽を支配しているのは、欧米、特に米国の音楽である。ところが、それらは歴史の産物なのだ。重要なのは、現代に支配的な米国音楽が、他文化のポピュラー音楽を商業的に取り込むことによって成立してきた点だ。例えば、キューバを中心とするカリブ音楽だ。カリブ音楽は私の好きなジャンルのひとつだが、これを聴くときある種の郷愁を感じるのが不思議でならなかった。しかし、もともと私達が慣れ親しんできた音楽の源流がそこにあるなら、ノスタルジーを感じることはむしろ自然であらう。

著者は、「アメリカ本意の立場でおこなわれ



谷村 智輝

【経済学部経済学科助手】

本学教員の推薦する

BOOK

『ポピュラー音楽の世紀』

中村とうよう著 岩波新書 1999年
定価700円(税別)

てきたこれまでのポピュラー音楽についての多くの言説を相対化し、むしろ非西欧、非先進国の音楽の価値を再発見しよう」という視点を明確に持っている。だから、米国の音楽産業に対する見方は極めて辛辣である。その一方で、様々な地域の音楽を渉獵し、数々の面白いエピソードを交えながらこれらを紹介している。世界の音楽の米国音楽への一元化とそれを支えた「マイシャリズム」に対する著者の批判は、同時に、虚構ともいえるべき常識に対する批判でもある。その基底にあるのは、世界の音楽に対する深い愛情だ。本書は著者による世界音楽賛歌だと評することができる。

さて、メディアの変化はポピュラー音楽に決定的な影響を与える。著者が指摘するように、昨今の情報化は、産業と消費の関係を大きく変えるだろう。これまでの一元化にかわって、多文化の進展が

次世紀音楽の展望として提示されている点は、大変興味深い。

以上のように著者のテーマや主張は骨太だが、世界音楽案内として音楽に読むこともできる。本書は、様々な音楽にふれ、それらについて楽しく語らう材料としても十分役立つことだろう。私自身も色々な音楽を愛する一音楽ファンでありつづけた。音楽に国境はない」ということが、本書の根本的なメッセージのひとつであると思うのだ。

アン・ブロンテ論

中岡洋 ほか編著 押本年真 執筆
開文社出版 三、五〇〇円

風土記の考古学

辰巳和弘 著 白水社 二、四〇〇円

エチカとは何か・現代倫理学入門
有福孝岳 編 工藤和男 執筆
ナカニシヤ出版 二、四〇〇円

歴史学の擁護…

ポストモダンリズムとの対話
リチャード・J・エワンス 著
今関恒夫 林以知郎 監訳 見洋書房 二、八〇〇円

維新と人心

伊藤彌彦 著 東京大学出版会 六、六〇〇円

変容する世界の家族

清水由文ほか 編 服部民夫 執筆
ナカニシヤ出版 二、四〇〇円

公益の追求者・渋沢栄一…

新時代の創造
渋沢研究会 編 沖田行司 執筆
山川出版社 二、五〇〇円

日本の会計士監査

百合野正博 著 森山書店 二、八〇〇円

刑事法入門 第三版

大谷實 著 有斐閣 二、一〇〇円

論集 大正期の泉鏡花

泉鏡花研究会 編 田中勲儀 執筆
おつう 四、八〇〇円

My Life. 仕事

第7回

が仕事を通して見た「社会」とは？
この意義とは？

先輩の声に耳を傾けながら、
生生活の現実を考える機会にしたいものです。

My Job
My Life

体験を生かして、
留学希望者の駆け込み寺
「留学図書館」を開設。

大学時代の私は、アルバイトでアナウンサーをしていて、放送局と学校を往復する毎日を送っていました。卒業に際しても、アナウンサーとして内定をいただいていたが、さて生業（なりわい）としてこの仕事を選んでもいいものだろうか。一見華やかに見えても、自分を表現する機会はなく、果たして自分を高めていけるのだろうかと思んだ末に、リクルート社に入社することを決めました。男女の差別が無く、やりたい仕事ができるのはこの会社だと感じたからです。

しかし、実際に仕事に就いてみると何と厳しいものか。「ビル倒し」といって、ビルの各階を回って飛び込み営業をかける日々に大きな壁を感じ、新幹線に乗ってふらっと実家に舞い戻っていたこともありました。その後は、採用計画を中心にコンサルティング営業に従



事するようになり、経営者の方と接する中、多くの勉強をさせていただきました。とくにある製薬会社の社長さんのお話を聞き、まるで地球の外からものを見るような視野の広さに驚嘆。「そうだ、私も国際的な視野を持たなければ」と決意。それから英語の勉強を日課として自分に課すようになりました。そして二年、ようやく「TOEFL」六〇〇点のレベルに達し、会社の留学試験にも合格して南カリフォルニア大学大学院に留学を果たしました。母などは「えらい歳をとった学生やなあ」とあきれ顔でしたが、三十歳でMBAを取得して、無事帰国。

その後は仕事を続けながら、合間をみて後輩や友人たちの兄弟の留学相談にのっていました。そこで分かったことは、既存の留学斡旋業者が特定の提携している学校しか紹介しなかったり、パッケージ型の留学プランしか持たないという現実でした。私自身、何を学ぶか、そのためにはどの大学を選ぶかを迷った揚げ句、自ら渡米して調べた経験があり、目的にあった留学プランがどんなに大切かを実感していました。「それなら、自分の手

で今までにない留学斡旋事業を始めてみよう」という気持ちになり、昨年九月、東京・自由が丘に「留学図書館」をオープンさせました。方針ははっきりしていました。留学志望者一人ひとりの目的に沿ったオーダーメイドプランの作成。必要な方には語学力の修得から留学後の就職先にまでアドバイスできる体制を整えました。そのため留学時に集めた資料を元に、米国だけでも千校以上の大学とパイプをつくりました。現在、下は小学生から上は六十五歳まで幅広い層の会員を得ていますが、驚くことに全国から留学相談にいらしゃるのです。こんなにみなさんに喜んでいただけて、しかもビジネスとしてやっていけるなんて何て幸せなんだろうと充実感を噛みしめる毎日です。後輩のみなさんも、やりたいことがあればあれこれ考えずチャレンジして欲しい。やる前にあれこれ考えるよりも、「走りながら考える」と聞かれる扉もあるのですから。

PROFILE

平川さんは、「私は、元来関西弁でいうところのビビリなんです」と自己分析する。ところが海外留学し、いろんな国の友人たちと交流するうちに、女性だから、あるいは三十歳になったからという日本人特有の既成概念から解放され、すくなく物事に考えられるようになったと語る。「だから、今ならたとえ事業に失敗したとしても、それが何なのと聞き直れる。むしろ躊躇してやりたいこともやれない方が悔いが残る」と考えるようになったと話す。



平川 理恵さん

【1991年文学部文化学科国文学専攻卒業】
「留学図書館」主宰。有限会社トラベシア代表

<http://www.ryugaku-toshokan.co.jp/>

シリーズ

『ONE PURPOSE』では、さまざまな分野で活躍する先達を訪ね、毎号「私と仕事」をテーマにお話を伺っていきます。

私と「My Job」

社会へ出てかれこれ？年。先輩たちあるいは「生きる」

歩んだ道も経験もそれぞれ違将来の自分にふさわしいキャリア・プランと学

My Job
My Life

データベース
マーケティングで、
企業と消費者を結ぶ
ベンチャー企業を起す。

大学院博士課程(前期)を終えた私は、野村総合研究所のコンサルティング部門に入社しました。当時、工学研究科の卒業生のほとんどがメーカーや研究機関に就職する中、シグタラックという業種を選択したのは、私くらいでしょう。野村総研では、経営コンサルティング業務に従事。国内大手メーカー向けに中長期経営戦略・計画の策定や、海外行政府の委託を受けて現地企業と日本企業の提携支援を行っていました。また学生時代から車社会に強い関心を持っていたこともあり、自動車産業にかかわるコンサルティングの機会も多く得られ、ハイブリットカーや低公害車の新事業計画を策定したり、日米構造協議(MOSS)における自動車通商交渉の分析チームにも参加しました。そんな多忙な日々にも明け暮れていた私に



も転機が訪れました。同志社大学の同窓で、法学部卒の森本さんがデータベース・マーケティング手法を活用した消費者向け付加価値サービスの会社を一緒に起こさないかという話を持ち込んだのでした。彼とは旧知の間柄であり、住友信託銀行に入行後、ハイパービジネススクールで学んできた彼の話は傾聴に値するものでした。単に企業の経営リダーを目指すだけでなく、自らが新しい市場や産業の創造に積極果敢に挑戦するハイパー大卒業生に触発された彼のベンチャー精神は、同様に私の中にもくすぶっていたものでした。かくして森本さんと私、そして米国で急成長を見せるデータベース・マーケティングに着眼していたチャード・パーキンソン氏の三人で、九六年に会社を設立しました。動力伝達機構という純機械工学を研究対象にしながら、エンジニアとしての道を断念して経営コンサルティングの仕事を選び、さらに起業家として立つことを選択したわけですが、今その足跡を振り返っても自分が回り道をしたという思いはなく、むしろ私にとっては同じ一本の道を走ってきたように思います。可能性の限界を乗り越えるために跳躍を試みてきた、その舞台が野村総研であったり、現在の会社だと思っています。かつてコンサルティングとして新規事業を支

援してきた立場から一転、現在は当事者として現実の困難に立ち向かっています。幸い事業は順風満帆であり、最初の事業として展開した飲食に付加価値サービスを提供するダイニング・プログラムも市場に浸透し始めました。内外の有力ベンチャーキャピタルから出資を得るとともに、会員データベース・マーケティングでは全米屈指の実績を誇るシグニチャーグループ(注:現G E キピタル)との提携関係を結ぶこともできました。とはいえベンチャー企業である以上、リスクは必ず付きまといま。ただ社会が変革期にある現在、どんな大企業に身を置こうともリスクから逃れられない時代なのですから、リスクを怖れず行動するのが現代に生きる者の正しい選択ではないでしょうか。とくに具体的に夢を描いている人は、それに向かって果敢に挑戦して欲しいと思います。たとえ失敗しても、立ち上がる環境が日本社会にも整いつつあるので、怖れることはありません。

PROFILE



齋藤 寛さん

学部生時代から日本機械学会関西学生会に所属し、二年間委員長を務めたという。日々の授業のほか、月一回の定例ミーティングで大阪へ。現在ももちろん多忙を極めるが、学生時代、野村総研時代から齋藤さんにとっては忙しいことが当たり前ようになっていた。にもかかわらず、もし後輩の皆さんでアントレプレナーを目指す人があれば、できるだけ相談にのってあげたいと語ってくれた。

【1989年工学研究科機械工学専攻博士課程(前期)修了】
シグニチャー・ジャパン株式会社社社長

E-mail : hsaito@sig.index.or.jp

お知らせ ANNOUNCEMENT

就職部からのお知らせ

■4月、いよいよ2001年採用に向けての、学生の皆さんの活動が本格的にスタートする時期です。昨年末からの自己分析その他の各種ガイダンス、セミナーに始まって、2、3月学年開催の約300社にも及ぶ学内セミナーを通しての企業・業界研究によって、就職観、志望動機もさらに深まったことでしょう。4月から5月は多くの企業で選考、内定が集中します。3年前の就職協定廃止を契機として、毎年、半月からひと月単位で採用スケジュールが早まっています。この傾向は文系男子において顕著で、1999年度の文系男子内定のピークは5月中旬で前年に比較して約ひと月ほど早期化しています。これら文系男子に比べれば、文系女子、工系の採用ピークは前年度と同じく6月中旬で大きな変化はみられませんが、それでも全体的な傾向として早期化の方向に向かっているとはいえましょう。しかし採用スケジュールそのものが早期化しているとしても、企業が志望動機の高い学生をじっくりと見定めようとしていることに変わりはありません。就職は決してゴールではなく、スタートです。あわてず、じっくり構えて志望の動機を確かめてください。

■『週刊東洋経済』（2000年1月29日号）に有力企業350社を対象とする国公私立大学学生の1999年4月採用の内定状況が掲載されています。同志社大学は私学のなかで早慶などとともにトップ・グループとして健闘しています。これはひとえに、先輩諸氏の活躍によるものです。今後、就職部では、社会に巣立つ学生の皆さんたちと卒業後も連絡をとりあい、これから就職活動を行う後輩学生へのサポートを目的としたネットワークを築いていきたいと考えています。

■東京で就職活動を行う学生の皆さんへの相談窓口として、3月6日（月）から東京渋谷の公園通りに面する同志社大学東京アカデミー内に「就職サポートデスク」を開設いたしました。詳細は、同志社大学就職部のホームページに掲載されていますが、月曜日～金曜日 10時～18時（ただし月曜日は13時から）、期間は6月末までを予定しています。就職に関わる相談を含めて、企業、校友の方もご訪ねください。



〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町19-5-101
TEL/FAX 03-3496-3014

■また就職部では、5月から6月にかけて京田辺校地で全学部1・2年次生を対象に、「ひとと仕事」シリーズを企画しています。国際機関、NGO、新聞記者その他のいろいろな分野に活躍されているOB・OGが、現場で働くということ、仕事をするこの意味、楽しさや悩みなどについて語ります。「自分にとっての仕事とは」を考えるきっかけにしてください。

携帯電話での 休講情報URLが変わります

昨年10月から携帯電話（iモード）を利用した休講情報を提供しています。また、4月からは、DoCoMoだけでなくセルラー（ツーカー）とJ-Phoneでも利用できるようになりました。休講情報の新しいURLは以下のとおりです。
<http://www.doshisha.ac.jp/mobile/>

「京田辺校地」に名称変更

田辺校地の新しい愛称（通称）を学生・教職員から募集したところ、66通の応募がありました。その中で一番応募の多かった「京田辺キャンパス」が新しい愛称（通称）に決定しました。公式の名称としては2000年4月1日から「京田辺校地」となります。

『ONE PURPOSE』 『Wild Rover』をよろしく

広報課では、大学と学生のみなさんとのコミュニケーションをはかるため、学生向け広報誌『ONE PURPOSE』（同志社大学通信）を4・6・10・12月の年4回発行しています。大学の新しい制度の紹介、大学の現状と問題点、キャンパスニュース、学生の体験談など、学生のみなさんの協力を得て、キャンパスライフをより充実させるような誌面作りを目指しています。発行後、各事務室・カウンター等で配布しています。また、ご父母にも大学の様子を知っていただく一助としてお送りしています。また、大学と卒業生をつなぐコミュニケーション誌『Wild Rover』を8・2月の年2回発行しています。この冊子もご父母に同志社大学についての理解を深めていただくため、お送りしています。これら、広報誌に対するご意見・感想、また企画・情報・アイデアの提供、寄稿などがございましたら、広報課までどしどしお寄せください。

ONE PURPOSE

同志社大学通信122号

2000年4月1日（4・6・10・12月年4回）発行

発行 同志社大学 広報課

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL. 075-251-3120 FAX. 075-251-3080
E-mail ji-koho@mail.doshisha.ac.jp